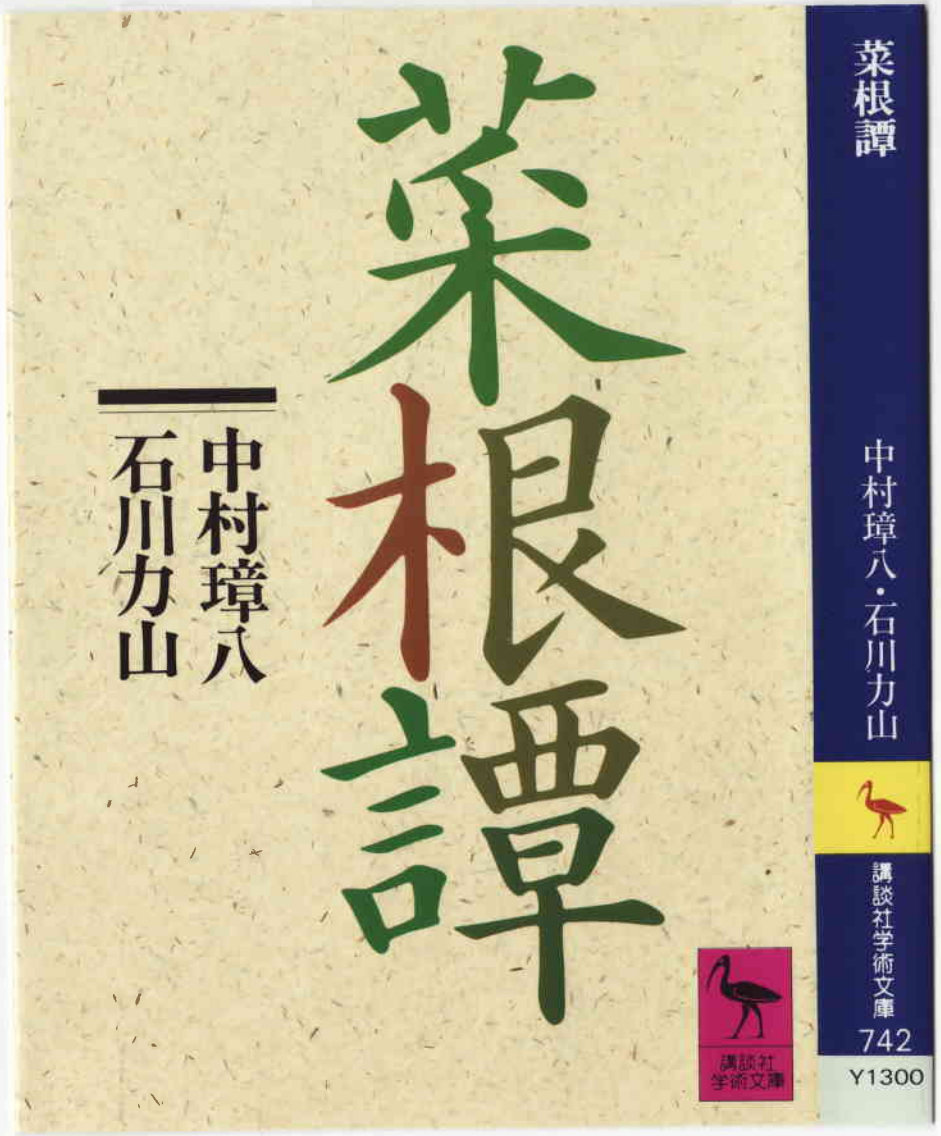
古徳云う、「竹影、階を掃うも塵動かず、月輪、沼を穿つも、水に痕無し」と。吾が儒云う、「水流、急に任せて、境常に静かに、花落つること頻りなりと雖ども、意自ずから閑なり」と。人、常に此の意を持して、以て事に応じ物に接せば、身心何等の自在ぞ。

古徳云、竹影掃レ階塵不レ動、月輪穿レ沼水無レ痕。吾儒云、水流任レ急境常静、花落雖レ頻意自閑。人常持二此意一、以応レ事接レ物、身心何等自在。

〔語義〕　○古徳云う―古徳は北宋代の禅僧雲峰志璿のこと。偈は『嘉泰普灯録』（巻八）『五灯会元』（巻十六）の伝中に見えるが、「月輪、沼を穿つも」が「月、潭底を穿つも」になっている。○吾が儒云う―吾が儒は北宋代の邵雍のこと（後集、第57段参照）。句は「天津感事」と題する二十六首の中の句（『伊川撃壌集』巻四）。○何等の―なんとまあ……であることよ。

〔訳文〕　古えの名僧は、「竹の影が階段に映り、そこを掃き払うようにしても、階段の塵は少しも動かず、月の光が池の水をつき破っているように映っているが、水に月の痕跡を残すことはない」と言っている。また、わが儒者は、「水の流れは激しいが、その激しい水の流れにまかせきっていれば、その境地はいつも静かであり、また、花がしきりに落ちて万物は変化してやまないけれども、その自然の様子を見ている心は、おのずとゆったりしている」と言っている。

人はいつも、このような気持ちをもって物事に当たったり人に接したりしていれば、なんと身も心も自由自在であることか。